

梅花 新たにひらく

旧年の枝

道元禅師

“梅花は早春をひらく”とは古仏の教えであります。

歳月の推移は早く、人を待つことがなく、自然の変化もまた同様です。

さて、年月を経た老梅樹は厳寒、暑熱の中を生きぬき、今日を迎えています。花一輪はそうした辛苦の中で咲き、暖かい春を呼びます。二輪、三輪、四輪、五輪…と限りなく清香をはなち、新春を賀しております。まさに精一杯に咲く姿こそ、美しくもまた雅に満ちたものがあり、冬の王者に等しいものがあります。

そこに暴風がおこり、風のまにまに舞いつつ、大地に雪のように散り敷き、変化極まりない中に、日を経て夏を迎え果実を結び、晩秋、葉は黄色となって樹下を覆い暖め、寒さに堪えてゆき再び春を呼ぶ。

こうした年月を多く重ねつつ、若木は老植樹となり、地中には広く深く、そしてたくましく根を扱って生き続けております。

この様相を人のせに例えてみれば、曾祖父母、祖父母、両親が幾十年粒々手書を重ね、今日を迎えたお蔭で、私たちの今の幸せや、国家の繁栄が招求されたことを深く考えざるを得ません。改めて報恩と感謝の念を捧げたいものです。

日に新たに、月ごとに進んでいく今日の私の生き様を思い、古慕の念と共に精進を重ねつつ、児孫へとその思いを伝えたいものです。

梅 花
 新 花 に
 ひ ら く
 旧 東 の
 枝
 小 平 道 元 傑 作

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部

解 説

道元禅師は、その生涯の中で、「正法眼蔵（しょうぼうげんざう）」「永平広録（えいへいこうろく）」等数多くの著作を残されました。

その書物は真の仏法を伝えようと様々な言葉を用いて著されています。

冒頭の言葉は「永平広録」巻三の上堂（じょうどう）＝弟子への説法（しよ）の中の言葉です。ここでは、「仏法の姿」を寒風の中で咲き誇る梅花にたとえて力強く示しているのです。